

んど認められなかつた。以上のことから子宮頸癌末期患者では免疫能の低下がうかがわれた。

2. BCG-CWS による免疫療法

昭和49年12月より昭和52年3月までの子宮頸癌再発22例, IV期6例に対し BCG-CWS BCG cell-wall skeleton (BCG-CWS), を免疫刺激剤とする免疫療法を試みた。対照として再発28例, IV期13例を無撰択にとり, これと比較した。投與法は初回 BCG-CWS 300 μ g を皮内または腫瘍内に注射, その後は2週間隔で200 μ g を皮内または腫瘍内に注射した。BCG-CWS 投与後 PPD が陽性化するものが多く, PHA 反応も殆んど上昇傾向を示し, stimulation index (S.I.) 20以下であつた10例中6例が S.I. 20を超えた。細胞障害作用 (cytotoxicity) も過半数が賦活された。生存期間を再発またはIV期と診断された時点よりみると50%生存率は対照の約4, 5カ月に比べ, BCG-CWS 投與例は約12カ月で明らかに生存期間の延長が認められた。

質問 (岡山大) 秋山 実男

BCG-CW 有効例においてPPD に対する Skin test はどうでしたか。

答弁 (九州がんセンター) 自見 昭司

治療前 PPD 陰性で治療後陽性化した症例は殆んど6ヵ月以上生存した。1例のみが6ヵ月以内に死亡した。

176. 各種治療前後に於ける婦人科悪性腫瘍の免疫学的検討

(東京医大)

根岸 能之, 藤原 幸郎, 秋谷 清
佐藤 博己, 大田 明生, 奴田原裕一
紅露 純, 中尾 愷二, 富久尾 信
清水 孝順
岡部 一裕

(同 外科) 長野 豊美

生体の腫瘍免疫機構に関し現在多くの研究がなされているが, 治療前後に伴う変化に関する知見は尚不明な点が多い。また免疫応答に最も関与する所属リンパ節の変化を検討することは癌患者の病態を解折する上で極めて重要である。我々は細胞性免疫及び血清抑制因子を経時的に追求し治療効果との関連性を検討した。

方法: 対象は子宮頸癌50例, 卵巢悪性腫瘍30例で, T細胞頻度はRFC, 癌患者リンパ球のPHA, Con. A, PWM に対する反応性並びに患者血清の抑制効果は Semi micromethod により $^3\text{H-TdR}$ の摂取率で幼若化率を測定した。

成績: (1) 頸癌患者リンパ球を自己血清添加培地で培養すると健常人血清, FCS, ヒト AB 血清添加に比べ幼若化率はI, II期でもIII期とほぼ同様に低下し, 早期例の血清中にも非特異的に in vitro では Serum Inhibitory Factor の存在が示唆された。(2) 頸癌リンパ節非転移6症例の末梢リンパ球(PBLs)の幼若化率の平均値はPHA 26.218cpm, その所属リンパ節リンパ球(RLNCs)の平均値は35.614cpm と PBLs<RLNCs であつたのに対し, リンパ節転移4症例のPBLsの平均値は20.273cpm, RLNCs は13.807cpm と PBLs>RLNCs であつた。その他炎症性リンパ節の平均値は16.228cpm であつた。(3) 頸癌手術施行前後の幼若化率は術後12例中10例に増加がみられたが, Tcell には著明な変動はみられない。(4) 放射線治療は immuno suppressive に働くと考えられ, 放射線・BLM 動注併用例では幼若化率は制癌剤投与終了時に, Tcell は放射線治療終了時に最も減少し, 経過良好例では時間の経過と共に上昇した。(5) 卵巢癌30例の Esquinon, OK-432治療例で幼若化率の上昇したものはIII期で66.7%, うち軽快71.4%, 不変28.6%, IV期で42.9%, うち不変33.3%, 残り全例死亡した。

177. 卵巢癌の予後判定に関する研究—細胞性免疫学的手法を用いて—

(大阪市立大)

中森 宏, 植田 勝間, 林 元一
梅咲 直彦, 迫 久男, 中出 潤子
李 東満, 須川 佑

1) 目的: 卵巢癌の早期診断ならびにその予後の判定は困難である。我々はすでに昨年の本学会において特異的免疫応答能を指標とした LAI test を卵巢腫瘍患者に応用し, その組織型の術前診断の可能性を報告したが, 今回は卵巢癌患者血清の免疫抑制効果(血清効果)を測定し, 術後患者を follow up することにより, 卵巢癌の予後判定へのパラメータを得んとした。

2) 方法: 血清効果の測定は既報の PHA 添加微量全血培養法を基本的手技とし, 正常人リンパ球の幼若化に対する患者血清の抑制率を30%患者血清添加により測定し, その成績を% inhibition にて表現した。なお対象は adenocarcinoma 21例, dysgerminoma 4例, 良性卵巢腫瘍35例である。

3) 成績: ① 末梢血の血清効果は健常人, 良性卵巢腫瘍患者の間に有意差は認めないが, 卵巢癌症例では有意に増強した。② 末梢血の血清効果は癌塊の増大にと